

私の軍隊生活

山形県 鈴木清次郎

私は大正九（一九二〇）年四月二十七日生れです。

宮宿小学校を卒業すると中学に入学、さらに福島高専に進み、卒業すると中国の中華団新民会という会社に就職した。当時は日本と中国との関係は悪化の途中であり、社内でも私たち日本人に対しては、あまり好感はもたれなかった。

昭和十六（一九四一）年三月、私たちは北京で現地徴兵検査が行われ、私は甲種合格となった。入隊はまだ先のことなので、入隊まで会社の仕事に専念していたが、日支戦争は拡大し、だんだん日常生活にも戦争の影がせまり、私は会社を退職して郷里に帰って来た。

帰郷して見るとあちらこちらの村から召集兵が「万歳！万歳！」と日の丸の小旗の波に送られて

中国戦線へ行った。

昭和十七年の正月を迎え、中旬になって役場の兵事係の人が私の入隊通知を持ってきた。

それによると、「昭和十七年三月一日、山形北部第十八部隊に入隊せよ」とのことで、いよいよ来るものが来たかと覚悟をきめたのでした。そして三月一日が待ち遠しい思いの日々でした。

昭和十七年三月一日、山形北部第十八部隊に入隊、三カ月の初年兵教育を受け、自分は幹部候補生として甲種特別幹部候補生試験に合格、仙台の教育係で幹部としての教育を受ける。

昭和十八年四月、宇品船舶隊の教育を受けるため派遣させられ、兵員及び武器弾薬等の輸送関係の教育を受ける。

同年八月一日、北海道小樽のホテルで、船舶第三十二停泊場司令部を編成し、自分は先発隊として千島のウレッジ島に上陸、揚陸班長として内地から送られて来る物品等を浜辺に揚陸し、野積みにして集積していた。

ウルップ島には約一個連隊が駐屯していた。当時この島の周辺には敵の潜水艦が数多く徘徊し、我が軍の輸送船を見張っていたので、油断ができなかった。

昭和十九年三月には、勲部隊一個師団が上陸して来た。自分はこのとき、揚陸小隊長として兵員、馬匹、武器弾薬及び糧秣等の陸揚げに精励していた。入隊前は、肉体労働などが必要とする体力の鍛練される仕事などに従事したことなかったため、将校になって、兵隊と共に揚陸作業をやっていたため腰痛となり、昭和十九年六月、内地へ送還となり、北海道の陸軍病院に入院となった。

さらに広島の陸軍病院に転送となり、ここでも治療が出来ないと言われ、再び福岡の陸軍病院に転送させられた。しばらくここで療養していたが、病院だけでは治らないということから別府温泉の田の湯温泉で療養していた。

しかし戦局は次第に悪化し、南方戦線の島々では玉砕が相次ぎ、北方のアッツ島も玉砕となり、

日に日に本土空襲も激しくなった。

別府の街も空爆があつてその被害が甚大となり、私の温泉療養ものんびりしておれず、自己退院を申し出て、北九州の船舶隊に転属、軍務に復帰することとなった。

昭和二十年八月二十五日、召集解除となり、部隊の残務整理等を行つて、九月下旬郷里山形の実家に帰つたが、兄弟姉妹も皆一人前となり家を出ていて、父は私が小学校二年生の時に亡くなつていたため、未亡人になつていた母一人が待つていた。

幸い母の姉が、実家近くの「大丸屋」と言う旅館に嫁いでいたので、何かと心強かつたと言つていた。その後、自分も「大丸屋」の仕事を手伝つたりしていたが、戦後の復興には燃料の必要性があることを考え、プロパンガス販売の事業を始め、現在はこのプロパンガス会社の社長を息子に譲り、私は会長となつてゐる。

我々は現在何不自由なき繁栄の世に生きている。

しかし幸せな世の中がいつまで続くだろうか、誰がその保証が出来るか。過去の歴史は平和と退廃のあとに必ずおとずれる戦争と言う悲劇を私たちに教えている。

戦争ほど悲惨で残酷なものはない。私たち戦争体験者の一人一人が、戦争を知らない子供や孫たちに「二度と起すな戦争を」のために、残り少ない余生を燃焼させ、平和な時代が永久になることを祈念するものである。

北方四島の思い出

福岡県 野田 盛行

私は、男二人、女三人（妹二人）、五人兄弟の次男として、大正十一（一九二二）年三月に生まれました。祖母が健在で、叔父が一人同居しており、総勢九人の大家族でした。

大正期に吹き荒れたデモクラシーや大恐慌も我が家には関係なきがごとく、笑い声の絶えることなく、楽しい一家団欒だんらんの家庭でした。

家業は農業で、田と畑、合わせて一町五反歩くらい所有していました。米と麦を生産し、畑は桑園で、養蚕を盛んに行っていました。

近隣の人たちは親切で人情に厚く、真にのどかで平和な集落でした。

私は小学校の義務教育を終わると、中学校に進学しましたが、卒業前に中途退学しました。

当時、青年学校が義務教育化され、約二年ほど